

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2017

課題番号：26370381

研究課題名（和文）ネイションとしての民衆：ウェールズのグウェリン言説にみるナショナリズム研究

研究課題名（英文）The Gwerin as a Nation: The Development of the Concept of the Gwerin and its influence on the Welsh Nationalism in the Victorian Wales

研究代表者

森野 聡子（ITO-MORINO, SATOKO）

静岡大学・情報学部・教授

研究者番号：90213040

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ウェールズ語の「グウェリン」こと民衆が、19世紀末においてウェールズ国民のアイコンとして構築されたイデオロギー的背景を考察した。グウェリンはジェントリ・資本家に対する労働者階級ではなく、前産業社会の農村共同体に生きる素朴な民衆という文化概念であり、ポスト産業社会に入った連合王国の構成員としてウェールズ人が体現すべき国民象として創造された。また、民衆の話し言葉をもとにウェールズ語の標準化や正字法の確立がめざされ、民衆向け雑誌を通じウェールズの歴史が編制され、ウェールズ文学作品が紹介されるなど、グウェリン言説がウェールズにおける国語・国文学の制度化に果たした役割も明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The objective of the research was to analyse the ideological and socio-cultural factors which stimulated the construction of the concept of the gwerin (meaning the Welsh folk) in the 19th century Wales. The idea of the Welsh speaking, Non-conformist working class people as the representative of the Cymry had been gradually developed during the 19th-century, and culminated in the idealised image of the cultivated, respectable folk living in an autonomous pre-industrial, agrarian community, was publicised by O. M. Edwards and his fellow cultural nationalists through the publication of popular magazines and other media. The significance of the invention of the gwerin is not only their achievements of creating the ideal register of the Welsh language based on the speech of the common people and the canonised literature for the populace. The Welsh gwerin was also aimed to provide the post-industrial UK with the alternative way of life which the Welsh, as an equal partner of the English.

研究分野：ケルト研究、ウェールズ語文学、メディア研究

キーワード：グウェリン ウェールズ民衆観 オックスフォード・ウェルシュ ジョン・モリス＝ジョーンズ O・M・エドワーズ ゴート/ゲルマン起源論 ヴィクトリア朝

1. 研究開始当初の背景

(1) 「マビノギオン」受容史研究

研究代表者は、平成 22～25 年度基盤研究(C)(一般)、「ウェールズ国文学の誕生から見る国民国家形成期における口承の位置づけと民衆観の変遷」において、「マビノギオン」と通称される中期ウェールズ語散文説話がウェールズの国文学として正典化される経緯を考察した。その結果、「マビノギオン」の評価は 19 世紀初頭のウェールズ知識層が、スコットランドの古詩と喧伝された「オシアン」詩編に匹敵する伝承文学の存在を内外にアピールするため、「ヨーロッパのロマンスの原点」、あるいは「アーサー王ロマンスの祖」として注目したことに発することが明らかになった。

平成 22～25 年度の研究期間内で対象とできたのはシャーロット・ゲスト (Lady Charlotte Elizabeth Guest, 1812 -1895) の英訳が登場する 19 世紀半ばまでであり、「マビノギオン」は主として中世騎士道ロマンスとして評価され、その範疇に入らないが、今日では「マビノギオン」11 話中もっとも文学的に完成されているとされる「マビノギの四つの枝」(Pedair Cainc y Mabinogi) についてはほとんど注目されていなかったことから、引き続き 19 世紀後半以降の受容史についても研究する必要を認識した。

(2) 『ブルー・ブックス』がウェールズ・ナショナリズムに与えた影響

1847 年に政府のウェールズ教育視察白書、通称『ブルー・ブックス』が上梓され、ウェールズの後進性はウェールズ語を母語とする労働者の教育・文化程度の低さに起因すると結論付けた。この報告への反発が、ウェールズ文化の担い手を支配階層から非国教会派の民衆、「グウェリン」(Welsh. gwerin) に移行させる契機となったという解釈は、1980 年代より Prys Morgan ら歴史学者によってなされ広く受け入れられている。けれども、『ブルー・ブックス』に反駁した当時の資料を調査したところ、「民衆」を表すのに「グウェリン」という用語は使われていないことが判明した。「グウェリン」と呼ばれる理想化された民衆像は 19 世紀末の産物にもかかわらず、非国教会派自由主義者による急進的ナショナリズムの台頭と『ブルー・ブックス』を結び付けるため、20 世紀の研究者によって遡及的に用いられ、慣習化していることが確認された。

以上のような問題意識から、ヴィクトリア朝ウェールズの民衆観と文化的ナショナリズムの関係には実証的見地からの研究の余地があると判断し、現代のウェールズ・アカデミズムにも少なからぬ影響を与えている「グウェリン」イデオロギーの解明に取り組むとともに、「マビノギオン」受容史の文脈では、「国民」としての民衆の伝統文学とし

て「マビノギオン」が位置付けられていたのかを解明したいと考えた。

2. 研究の目的

19 世紀ヴィクトリア朝において、産業化による工業地帯の発展や普通選挙運動・労働運動の拡大によって労働者の存在が社会的関心を集めるなか、

(1) 時代・階級を超えた文化概念として提示された「グウェリン」という民衆イメージが、19 世紀末ウェールズにおいて構築されていたイデオロギー的背景

(2) グウェリン言説がウェールズの国文学・国語観、民族のメディア表象といった文化的ナショナリズムの編制に与えた影響

以上の 2 点を検証することを本研究の目的とした。

3. 研究の方法

ウェールズにおけるグウェリン言説と文化的ナショナリズムの関係を明らかにするために、主として以下の研究方法を採用した。

(1) グウェリン言説の収集と分析：

グウェリン・イメージ発信に大きな役割を果たした、歴史学者で政府視学官や国会議員も務めた O・M・エドワーズ(O. M. Edwards, 1858 - 1920) 発刊のウェールズ語雑誌『カムリ』(Cymru, 1891-1927) を一次資料に、そこで編制されたグウェリン観を分析した。

(2) オックスフォード・ウェルシュによるウェールズ語改革についての調査：

グウェリン言説形成のイデオロギー的背景を調べるため、グウェリン言説の主な担い手となった「オックスフォード・ウェルシュ(Oxford Welsh)」と呼ばれるオックスフォード大学出身のウェールズ人知識人が雑誌に投稿した評論を一次資料に、彼らが想定したウェールズ文化や伝統のあるべき姿、グウェリン像を分析した。対象としたのは前述のエドワーズに加え、北ウェールズ大学(現バンゴール大学)ウェールズ語科教授で文法学者のジョン・モリス＝ジョーンズ(John Morris-Jones, 1864 -1929) である。オックスフォード・ウェルシュに注目したのは、彼らがウェールズ語の綴りの標準化を推進し、その際、グウェリンを言語共同体として捉え、民衆の話し言葉こそ真正の国語であるとの考えから正字法を作り上げようとしたからである。

4. 研究成果

(1) 第 15 回国際ケルト学会(2015 年 7 月・グラスゴー大学)での研究発表

O・M・エドワーズが発行した民衆啓蒙のための雑誌『カムリ』において、現在ではウェールズ語文学の古典と評価されている中世文学「マビノギオン」がどのように扱われ

ているか、および同誌で紹介された文学者や文学作品、歴史・文学史に関するエッセイ、そして同じくエドワーズが企画した一般向け古典文学選書「ウェールズの古典シリーズ」(Cyfres Clasuron Cymru, 1898~1901)からエドワーズらウェールズの知識人が構築しようとしたウェールズの歴史・伝統文化・国文学観に関する言説を抽出し、その成果をもとに *The Mabinogion of the people, by the people, for the people* というタイトルでグラスゴー大学で開催された国際ケルト学会にて口頭発表を行った。

研究の結果、『カムリ』で取り上げられているウェールズ文学は 19 世紀の詩・詩人が一番多く、散文についてはまれで、特に「マビノギオン」からは『キルフーフとオルウェン』、『ペレディール』、『フロナブウィの夢』の 3 話しか紹介されていないことが判明した。これは、エドワーズの文学観において「マビノギオン」が「ウェールズ諸公の時代」(7~13 世紀)の宮廷文学と位置付けられており、民衆文学という観点からは、彼が「覚醒の時代」と名付けた 1730 年代以降のメソジスト革命と文芸復興がより重要であると考えられたからであることがわかった。

一方、「マビノギオン」のウェールズ語翻案版が世紀末より子ども向けに発行されるようになるが、シャーロット・ゲストの英訳同様、ヴィクトリア朝のモラルに抵触する部分は書き換えられていた。この点からも、「マビノギオン」の受容には、今日とは大きな隔りがあることが確認できた。

(2) ウェールズにおける歴史観の編制

エドワーズらは、『カムリ』等を通じて、ウェールズ民衆が共有すべきウェールズ人の「正史」の編制も行った。その意義を明らかにするために中世ウェールズで書かれた「ブリット(brut)」と呼ばれる年代記から 19 世紀におけるウェールズ文芸復興の立役者の一人トーマス・プライス(Thomas Price, 1787-1848)が著したウェールズ語によるウェールズ史の大著『ウェールズおよびスラウェリン・アブ・グリフィズの死までの古代ウェールズ民族の歴史』(*Hanes Cymru a Chenedl y Cymryo'r Cynoesoedd hyd at Farwolaeth Llywelyn ap Gruffydd*, 1836-1842)までの主要な歴史書の記述を比較分析し、第 34 回日本ケルト学会研究大会でのシンポジウム「王統史から国民史」において、君主の年代記から民族の歴史としてのヒストリオグラフィーがウェールズで誕生してくる経緯について発表した。この研究において、民衆が国家や歴史の担い手として認識されるのは、エドワーズらのグウェリン言説が最初であることが確認された。

19 世紀におけるウェールズ人のアイデンティティが反イングランドとして定義されていたのではないことは、これらの歴史記述からも明らかである。ウェールズ国民の理想

像をグウェリンこと民衆に求める思潮は、同時期のウィリアム・モリスによる中世のクラフツマンシップの評価やナショナル・トラスト運動などに通じる民衆芸術礼賛と自然回帰と同様の素地をもつものと解釈した。すなわち鉄鉱や炭鉱の産地として連合王国の産業立国を支えてきたウェールズが、19 世紀末のポスト産業社会においてイングランドの対等のパートナーとして果たすべき役割を、前産業社会の素朴だが教養ある民と定義された、ロマン主義的なグウェリンが果たすことをエドワーズらは期待したと結論した。

(3) アーサー王物語の受容についての比較研究

19 世紀はまた、ケルト諸語圏だけでなくヨーロッパでも広くアーサー王物語の再評価や受容が進んだ時代である。研究代表者は平成 26 年より中央大学人文科学研究所の客員研究員に招へいされ、アーサー王物語についての研究プロジェクトの一員としてウェールズ語のアーサー物語の考察を担当した。その成果は『アーサー王物語研究 源流から現代まで』として公刊された。

日本ケルト学会が平成 27 年度の研究大会で企画したシンポジウム「近現代のケルト文化圏におけるアーサー伝承の位置づけ アイルランド、ウェールズ、ブルターニュの事例から」においては、研究代表者は 19 世紀ウェールズにおけるアーサー王物語の受容の特異性について発表した。すなわち、18 世紀にはすっかり下火になっていたアーサー関連の文学作品が 18 世紀末から復活するのは、同時期のオシアン・ブームに触発された「ケルト的なもの」への憧れとみなすことができるのに対し、ウェールズにおいては自らを「ケルト」と認識する意識は低く、したがってアーサーは「ケルトの英雄」ではなく「ブリテン島の住民」を指す「ブリテン人」の英雄として受け入れられてきたことを指摘した。ウェールズの民族的アイデンティティの定義において「ケルト」という概念が果たした役割は主として言語学的なもの(印欧比較言語学におけるケルト語派の一つとしてのウェールズ語)であり、「ケルト」が自らの出自や民族的特質として議論されるようになるのは 19 世紀末に印欧比較言語学から比較神話学が分岐するようになってからであると推察した。このことは、前述したエドワーズの民衆文学観に「マビノギオン」が含まれていなかったという点にも関係する。「マビノギオン」の評価は、騎士道ロマンスから「ケルト神話」へと変わることで 20 世紀以降、本格化するからだ。

(4) ウェールズ人の人種起源説

エドワーズは、ケルト人の到来以前に「イベリア人」と呼ばれる、背が低く浅黒い肌の先住民がブリテン島に居住していたことを、あたかも規定の事実のように随所で記して

いる。また、モリス＝ジョーンズも、印欧語族のなかでもケルト諸語に特有の形態である、動詞が文の先頭にくる VSO 構文を非印欧語族であるイベリア語の痕跡であるとみなし、それがウェールズのグウェリンの話言葉に受け継がれていると主張した。

グウェリン言説の基盤に以上のような人種起源論が存在することが明らかになったことを受け、平成 28 年からは、新たにケルト人についての「人種論」に関する言説考察を開始した。

そもそも「ケルト」という概念はヨーロッパの諸言語の分類上、誕生したもののだが、その当初から言語と民族（当時の用語でいうと「人種」）は不可分のものとされ、ケルト人＝ケルト語を話す人種として言説化されていたことが、ケルト学の先駆者とされるウェールズ出身の比較言語学者・博物学者エドワード・スルウィッド (Edward Lhwyd, 1660-1709) の著作の分析から確認された。

スルウィッドの業績は、一般には、ケルト諸語の概念を確立したこと、いわゆる P/Q ケルト語の分類を導入したこととされるが、P/Q ケルト語の区分は大陸ヨーロッパから移住したとされる「島のケルト」には二派があるという仮説を前提としており、彼らの到来の時期やルート、定着地に言及することで、ブリテン諸島のケルト諸語地域の起源論という側面をもつに至った。そのため、18 世紀におけるスルウィッドの論説は言語学よりもむしろケルト諸語地域におけるナショナリズム、民族的アイデンティティ形成に影響を与えたことが判明した。とりわけ、イングランドと併合し、グレート＝ブリテン王国の一部となったスコットランドにおいて、アイルランドからの移民国家という従前のアイデンティティとは異なる民族起源説の形成に活用された点が注目される。

その一端として、スコットランドの古事研究家ジョン・ピンカートン (John Pinkerton, 1758 - 1826) のスコットランド＝ゴート/ゲルマン起源論と、それが巻き起こした論争に関して調査した。これは 19 世紀イングランドで台頭するテュートン (アングロ＝サクソン) 人種起源論に同調するものであり、ブリテン島の住民はゲルマン系かケルト系かという議論がイングランドの人類学者だけでなくケルト諸語地域の知識層も取り込んで展開されていた様子を当時の資料をもとに検証した。

以上の結果、ケルトとゲルマン（あるいはゴート・テュートン）は、印欧語族研究においては同じ印欧祖語から分岐した親族関係にあたりとみなされる一方、19 世紀に誕生するエスノロジーにおいては、ケルト系先住民はアングロ＝サクソン人を含むゲルマン人とは正反対の身体的・形質的特徴をもつ「人種」として定義される言説が形成されていくことが確認された。これは 19 世紀後半において、ケルト人、とくにアイルランド人を劣

等人種とする人種主義的言説につながっていくものである一方、非印欧語族で非コーカソイドの石器時代人、すなわち「イベリア人」と通称された非ケルト系先住民をグウェリンのルーツとしたエドワーズやモリス＝ジョーンズの見解の特異性を表し、同じケルト諸語地域であっても、それぞれの人種的・民族的ルーツの定義が異なっていくことについてのさらなる研究の必要性が課題として残された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

森野聡子, エドワード・スルウィッドにおける「島のケルト人」論再考, 『ケルティック・フォーラム』(日本ケルト学会), 査読有, 第20号, pp.17-26, 2017 年.

森野聡子・梁川英俊, 黎明期のケルト学, 『ケルティック・フォーラム』(日本ケルト学会), 査読有, 第20号, pp.5-16, 2017 年.

森野聡子, ウェールズのアーサー物語における「ケルト性」の問題, 『ケルティック・フォーラム』(日本ケルト学会), 第19号, pp.35-36, 2016年.

森野聡子, 「ブリティッシュ・ヒストリー」からウェルッシュ・ヒストリーへ, 『ケルティック・フォーラム』(日本ケルト学会), 査読有, 第18号, pp.2-14, 2015年.

〔学会発表〕(計 6 件)

森野聡子, ゲルマンが先かケルトが先か, シンポジウム「人種論としてのケルト」, 第 37 回日本ケルト学会研究大会, 2017 年.

森野聡子, エドワード・スルウィッドにおける島のケルト論再考, シンポジウム「黎明期のケルト学」, 第 36 回日本ケルト学会研究大会, 2016 年.

森野聡子, ウェールズのアーサー物語における「ケルト性」の問題, シンポジウム「近現代のケルト文化圏におけるアー

サー伝承の位置づけ アイルランド、ウェールズ、ブルターニュの事例から」, 第 35 回日本ケルト学会研究大会, 2015 年 .

Satoko ITO-MORINO, The Mabinogion of the people, by the people, for the people, 15th International Congress of Celtic Studies, 2015.

森野聡子, プリティッシュ・ヒストリーからウェルッシュ・ヒストリーへ, シンポジウム「王統史から国民史へ」, 第 34 回日本ケルト学会大会, 2014 年 .

森野聡子, ウェールズ伝承文学におけるアーサー物語の位置づけ, 日本ケルト学会東京研究会 / 中央大学人文科学研究会公開研究会, 2014 年 .

〔図書〕(計 4 件)

森野聡子, アイステズヴォッド, ウェールズ語, ウェールズ語雑誌, O・M・C・エドワーズ, 復興運動の背景, 他 (56 項目 / 580 項目中), 木村正俊・松村賢一編『ケルト文化事典』, 東京堂出版, 2017 年 .

森野聡子, ウェールズ伝承文学におけるアーサー物語の位置づけ, 中央大学人文科学研究会編『アーサー王物語研究 源流から現代まで』, 中央大学人文科学研究会研究叢書 62, 中央大学出版部, pp. 33-80, 2016 年.

森野聡子, ウェールズという土地 (pp. 231-239), アイステズヴォッド (p. 349), 『マビノギオン』 (p. 360), 木村正俊・太田直也編『ディラン・トマス 海のように歌ったウェールズの詩人』, 彩流社, 2015 年 .

森野聡子, ウェールズの鉄鋼・炭鉱の繁栄と文化の再評価 (pp. 664-665), アバリストウイスとランピター 中部の大学町 (pp. 690-691), 川成洋他編『イギリス文化事典』, 丸善出版, 2014 年 .

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

取得状況 (計 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
取得年月日 :
国内外の別 :

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森野 聡子 (ITO-MORINO, Satoko)
静岡大学・情報学部・教授
研究者番号 : 90213040

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :

(4) 研究協力者

()